

## 一第15編一クレタ島の寒村にて

EUの一員となり商業的観光化が進んだギリシャだが、その後には経済は破綻した。しかし、数多の島の生活の大部分はこれまでの静けさと素朴な美しさを引き継いで行くに違いない。アテネの喧噪から逃れて、少し離れるだけで別世界が広がる。さらに夕暮れ時にピレウスの港から出航してエーゲ海を一晚揺られると、朝にはギリシャ最大の島、クレタ島に着く。東西に長い島には、内陸のクノッソス神殿跡をはじめ、北岸、南岸に様々な美しい都市や集落が点在している。バスでもよし、自転車やバイクや車でもよし、時間をかけて島を巡るべし。名の知れた観光地の少ない南岸の曲がりくねった街道を辿ると、本当に素朴な集落にいくつも出会うことができる。遙か海のかなたにリビアやエジプトを感じながら、地中海の空と乾いた大地を眺めていると、古代の歴史が俄に迫ってくる。1977年の春、私はアテネを去りドイツに向かう直前に、再び僅かな家財道具一式を車に詰め込み、2度目のクレタ島を一週間かけて一人旅をした。以下の一枚の写真とメモは、その時に出会った忘れ得ぬ寒村の情景の断片である。

「一本の木。その背後の四角い箱のような家。白く塗られた立面に、青いペンキの塗られた出入口と窓が一つずつ。その木陰には木製のテーブルと椅子が二つ、三つ。見知らぬ一家がにこやかに迎えてくれた。背後にやはり真つ青な入り江が覗く。クレタ島南西岸

の寒村レントラス(Lentras)で遭遇した、これ以上にも削ぎ落とすものがない住まいである。これはいわゆる『まちなみ』ではない。しかし、住まいや建築が集合してできるまちなみは、単なる身勝手な断片の集合を意味しない。一つの素朴な住まいに見取れる周囲との絶妙な関係性と、そこから広がる豊かな生活空間の予感こそが、その場所に生まれ、育まれるまちなみの前提である。この住まいは、いわばここに立ち上がるべく組み込まれた『まちなみの遺伝子』のようなものだ。

キクラデスの島々や、クレタ島の著名な集落は旅人にとって確かに美しい。しかし、こんな限られた要素で成り立っている住まいの最小限の作法こそが、その原点ではないのか。地域の風土や生活文化に根ざした英語圏の『バナキュラー(vernacular)』や『インディジナス(indigenous)』という言葉は、漢字圏の『風土』や『風水』と呼応する。そして、場所と住まいと人との関係のあり方を今再び私たちに問いかけてくる。それは、私たちの多くが近代化の過程で失ったものどもへの憧憬だけではない。むしろ住まいの原型としての力強さと、簡素なものを持つ意志の持続性故に、私たちの現代の住まいやまちなみに対する痛烈な批判として迫ってくるのである。」

モノと利便性に溢れた現代文明の対極にある寒村から放たれた、控えめな、しかし力強いメッセージは時空を超え、今なお新鮮で抗しがたい魅力に溢れている。



写真15-1 レントラスの民家

\*1  
Crete: ギリシャ最南端に位置する同国最大の島

\*2  
Knossos: クレタ島の代表するミノス文明の遺跡